社会科観形成のための「新しい時代の教養」
－公民的資質育成の視点に着目して－

西　　孝一郎

Ⅰ．はじめに

これまでの教養概念の中心には、文字があり書物がおかれていた。「教養がある」人とは、多くの書物を読み、古今の文献に通じている人を指すことが多かった。しかし、これらは個人の教養に過ぎず、教養概念の一部でしかないことがわかる。このような考えは、すでに20年以上前から出されており、阿部（1997）は「自分が社会の中でどのような位置にあり、社会のためになにができるかを知っている状態、あるいはそれを知ろうと努力している状況」を「教養」があると定義づけしている。

また、中央教育審議会答申では、「自らの立脚点を確認し、今後の目標を見定め、その実現に主体的に行動する力＝新しい時代の教養」と定義した上で、「一人一人が広く深い教養を持ち、互いの生き方を認め合い、高め合うことのできる社会を築くことは、国際社会において尊重され尊敬される「品格ある社会」の実現につながる。」と述べている。[1)]

つまり、今の時代における「教養」には、社会の中での位置を知り、社会のために何ができるかを考えることが求められているのである。これは、まさに社会科の目標とされる「公民的資質」そのものである。

「公民的資質」が学習指導要領で社会科の目標となったのは1968年のことであるが、現在では、「公民的資質を次のように説明している。「『公民的資質』とは、国際社会に生きる平和で民主的な国家･社会の形成者、すなわち市民・国民として行動する上で必要とされる資質を意味している。したがって、公民的資質は、平和で民主的な国家･社会の形成者としての自覚をもち、自他の人格を互いに尊重し合うこと、社会的義務や責任を果たそうとすること、社会生活の様々な場面で多面的に考えたり、公正に判断したりすることなどの態度や能力であると考えられる。」[2)]

このように公民的資質の基礎を養う社会科であるが、学生のもつ「社会科観」には、多分にそれまでの教育が関係している。いかに多くのことを覚えるのかが価値になるという社会科の在り方が、残念ながら今でも残っているのには、さまざまな形で思考力を問う問題に変化しているとはいえ、大学入試の影響もあるだろう。これは、「新しい教養」の考えからも「公民的資質」の観点からも、ずれを感じるものである。

学生の社会科観の形成については、これまでもいくつかの研究が見られる。戸田は社会科系教職科目受講生へのアンケート調査から、社会科に対する意識と社会科教育法の課題を述べている。[3)] また、教職課程後半期の学生が、学習指導案の書き方などを学ぶ中で、社会科観を形成していく過程を述べている。[4)]

これらの研究は、教職課程後期の学生の社会科観形成に関するもので、教職課程前期の学生や幼児教育を専攻する学生の社会科観形成に関する研究は少ないのが現状である。

そこで、本研究では教職課程前期に位置付く「教科に関する科目」である「社会」の中で、「社会科観」を育てる過程を述べたい。その中で、「新しい時代の教養」を学生につけるのは、「公民的資質」を身につけることである、という視点に着目していきたい。

Ⅱ．研究の方法

2017年前期の「教科に関する科目」「社会」の授業は、本学こども教育学科で、主に小学校の教員を目指す「学校教育コース」の学生（1年14名）と、主に幼稚園教員・保育士を目指すが小学校教員の免許取得も目指す「幼児教育コース」の学生（2年8名、3年1名）が履修した。

学校教育コースの学生にとっては、最初に受講する「教科に関する科目」の一つであり、「社会科観」を育

てるとともに、「教職観」にもかかわる科目としての責任を感じている。

また、幼児教育コースの学生の主たる目的は、幼稚園教諭免許、保育士資格に加えて小学校教諭免許を取得するということであるが、単に免許取得だけでなく、学ぶことの楽しさを味わってほしいと考えている。

本研究では、この「社会」の授業実践に対する学生の反応とリフレクションペーパーを分析し、「社会科観」の形成がどのように行われていったのかを考察することにする。

本研究中に点線枠で示すものは、学生の授業における反応であり、実践枠で示すものは、学生のリフレクションペーパーから抜粋したものである。

Ⅲ.「新しい時代の教養」の視点から『体験とともに』

各大学において、教養教育を進めていくために、「社会や異文化の中で進んで様々な体験をし、自己や人生について考え、自分の生き方を切り開く力を身に付けることが重要であり、そのための機会を充実する必要がある。併せてこうした幅広い経験をすることの意義を社会でも積極的に評価すべきである。」とされている。[5)]

つまり、教養教育は社会と切り離されたものではなく、社会での体験を自分の生き方と結び付けて考えることが大切であるとされているのである。

教科に関する科目「社会」の中では、この社会での体験と自分の生き方とを結び付けることを重点的に取り組んできた。

1. 地域の生産や販売に携わっている人々の働き（スーパーマーケット）2017.4.28

小学校学習指導要領（第３学年及び第４学年）の内容（2）として、次のことが示されている。

地域の人々の生産や販売について、次のことを見学したり調査したりして調べ、それらの仕事に携わっている人々の工夫を考えるようにする。

ア　地域には生産や販売に関する仕事があり、それらは自分たちの生活を支えていること。

イ　地域の人々の生産や販売に見られる仕事の特色及び国内の他地域などとのかかわり[6)]

この内容を学生にとらえさせるために、スーパーマーケットの見学を取り入れた。

本学のまわりは住宅地が多く、大型のショッピングセンターなどもいくつか見ることができる。その中で本学に最も近く、学生も時々買い物に行くことがあるスーパーマーケットの見学を実施している。今年度も、「社会」の３回目の授業として、スーパーマーケットの見学を行った。

学生は、前述のように「社会科は覚える教科だ」という思い込みをもっている。その思い込みを見直す意味でも、授業の早い時期にこのような見学活動を取り入れるのが効果的であると考えている。

まず、見学に行くにあたって、「スーパーマーケットで働く人は、多くの人々が買い物をしやすくするために、どのような工夫をしているのでしょうか。」という課題を設定した。この課題は、小学校の授業としてもよく示される課題である。筆者の「社会」の授業では、このように、小学校の授業を将来の教師の立場で受けるという体験を多くしている。

学生は、スーパーマーケットの方から話を聞きながら見学して、普段何気なく見ている売り場に、どのような工夫があるのかを見つけてきた。

- お買い得な食品の値札は色が黄色でわかりやすい。
- 新商品はお客様の目につく場所に置く
- 広告の品は手に取りやすいように平積みしてある
- 重いものやとけやすいものはレジの近くに置く
- 鏡を使って奥行きを出す。防犯のためもある。
- ポイント何倍デーや何％オフなど、お客様に有利な情報を大きな字で看板などにして宣伝していた。
- 店の入口付近に旬の野菜を置いて季節感を出す
- 商品が奥まで見えるように商品棚を前下がりの斜面にしている。
- 商品に関連する商品も近くに置く。（例）食パン等の近くにシリアルを置く＝朝食関連
- 商品を取り出しやすいように、どんどん手前に寄せながら並べて置く
- お惣菜コーナーでは、取りやすいように買い物かごを置き、より手にとってもらいやすいようにする。
- 商品の数をたくさん置くことでお客様の視線をひく。

・お客様が快適に買い物できるように休憩場所を設置する。
・季節の行事のコーナーがあり、その行事の歌が流れている。

学生のほとんどが、小学校の社会科でスーパーマーケットの見学を行っているが、教師の立場で見直すと、より多くのことを見つけることができると感じていた。

また、将来実際に見学を行うときに、どのような点に配慮して子どもに気づかせていけばいいのかを考えることができた。

スーパーマーケットの見学を終えての感想には、次のようなものがあった。

・「買ってほしいもの」「旬のもの」「おすすめなもの」「新商品」「できたてなもの」といった感じの札やポスターがあったりと、買う意欲を高めたりする見えない力が働いているように思いました。
・周りのスーパー等に行って見学させてもらうことによって、自分たちが生きていくためにどんなことがされているかを知り、感謝や尊敬の意識が芽生えるのだと思いました。
・子どもの目や考えと自分自身がかけはなれている分、子どもと行ったときに、子どもがより多くのことを発見出来たり、あたりまえだと思っていたことが実は大きな工夫であったと気づくことができたりするには、どうすればよいか考えたいと思いました。

このように、社会で働く人と自分とのかかわりに気づき、教師としての自分の生き方を考えることが、「教養」の第一歩だと考える。

2. 地域の人々の安全を守る諸活動（消防署）

2017.5.19

小学校学習指導要領（第３学年及び第４学年）の内容（4）として、次のことが示されている。

地域社会における災害及び事故の防止について、次のことを見学、調査したり資料を活用したりして調べ、人々の安全を守るための関係機関の働きとそこに従事している人々や地域の人々の工夫や努力を考えるようにする。

ア　関係機関は地域の人々と協力して、災害や事故の防止に努めていること。
イ　関係の諸器官が相互に連携して、緊急に対処する体制をとっていること。[7)]

この内容を学生にとらえさせるために、消防署の見学を取り入れている。

本学は京都市右京区にある。右京区の範囲は広く、南北約 30 ㎞、東西約 20 ㎞に及び、京都市内の総面積の 35％に当たる約 290 ㎢を有している。この広大な地域の消防活動を担っているのが右京消防署である。範囲が広いため、右京消防署管内に４か所の出張所をもっている。

本学は、地域連携を大切にしている大学でもあり、右京消防署の見学を取り入れることの意義は大きいと考える。そこで、本学科開設以来３年間、右京消防署の見学を行っている。今年度も「社会」の５回目の授業として、右京消防署の見学を計画した。

まず、見学に行くにあたって、「消防署を見学して、どのように火事から人々を守っているのか調べよう」という課題を設定した。この課題は、小学校の授業としてもよく示される課題である。

見学では、まず消防署の方から消防の活動についての話を聞いた。現場経験に基づく話を聞くことができる場である。

「消防の場では、決断しなくてはいけないことがある。決断と判断の違いは何だろう。決断は、いくつかの判断を消して一つにすることだ。」

という言葉に、学生は感銘を受けていた。

次に、実際の消防活動にかかわる見学と体験を行った。消防車の説明を受け、防火服の着脱訓練をさせてもらった。重い防火服を着て動くことの困難さを、学生は感じていた。女性の消防士の働く姿に、親近感とともに尊敬の気持ちをもったようである。

最後に、消防訓練の様子を見て、消防士に質問をした。女性も男性と一緒になって消火に当たる様子を見て、驚いていた。

筆者が、

「なぜ、消防士になろうと思ったのですか。」

と尋ねると、若い２人の消防士（男性と女性）は、いずれも、

「一人でも多くの命を助けたいと思ったからです。」と、答えた。

同様のことを学生が質問した年度もあったが、やはり同じの答えが返ってきた。この「一人でも多くの命」という言葉は、学生の胸に深く響いたようである。

消防署の見学を終えての感想には、次のようなものがあった。

- 私たちと同じ年代ぐらいの人が、毎日厳しい訓練やトレーニングの中で、人々を助けたいという気持ちで消防隊として働いていて、すごく刺激をもらった。
- 京都の町であまり消防車の音を聞いたことがなく、火事が少ないのは、消防士の方々のがんばりだけでなく、消防団や京都の人々の意識が高いからだと聞いて、すばらしい町であると思いました。
- 右京消防署は実家から近く、小学校時代にも一度見学に行った記憶があります。しかし、今回は「教師」の目線で見学できたかと思います。「本物」を体験することは、とても大切だと思います。私が小学校時代に見学したことを覚えていたように、子どもたちにも、すばらしい原体験として覚えてもらいたいです。
- 今回の授業のように、消防署に訪れる機会などそうそうない。もしかしたら、小学生の頃の社会科見学だけだという大人もいるだろう。それほどに、小学生の頃の学習というものは一生の中でもかなり重要なものになるかもしれない。「一生に一度となるかもしれない」その学習が、子どもたちの未来のためになるような、そんな授業ができるようになりたい。
- 「人のために役立ちたい」という思いは、教職も同じだと思いました。子どもたちが楽しく勉強できるように考えていくことはとても大事だと改めて感じました。自分の理想の先生像がだんだんできてきました。
- 消防署では「ありがとう」という言葉を欠かさず言うことで仲間との関係を深めていることを知り、「ありがとう」という言葉の大切さを改めて感じた。「ありがとう」という言葉は、人を嬉しくさせる言葉なので、私も友達や先生達などにたくさん使っていきたいと思った。

このように、消防署の見学を通して、消防署の仕事を理解するだけにとどまらず、人としての生き方、教師として生きていく自分を結び付けて考えている様子が見られる。社会の体験と自分の生き方を結びつける「教養」は、こうして生まれると考える。

Ⅳ.「公民的資質」の視点から 『調査・分析』

小学校社会科の新しい学習指導要領は、目標を次のように示している。

社会的な見方・考え方を働かせ、課題を追究したり解決したりする活動を通して、グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和的で民主的な国家及び社会の形成者に必要な公民としての資質・能力の基礎を次のとおり育成することを目指す。

(1) 地域や我が国の国土の地理的環境、現代社会の仕組みや働き、地域や我が国の歴史や伝統と文化を通して社会生活について理解するとともに、様々な資料や調査活動を通して情報を適切に調べまとめる技能を身に付けるようにする。

(2) 社会的事象の特色や相互の関連、意味を多角的に考えたり、社会にみられる課題を把握して、その解決に向けて社会へのかかわり方を選択・判断したりする力、考えたことや選択・判断したことを適切に表現する力を養う。

(3) 社会的事象について、よりよい社会を考え主体的に問題解決しようとする態度を養うとともに、多角的な思考や理解を通して、地域社会に対する誇りと愛情、地域社会の一員としての自覚、我が国の国土と歴史に対する愛情、我が国の将来を担う国民としての自覚、世界の国々の人々と共に生きていくことの大切さについての自覚などを養う。[8)]

このように、新学習指導要領では、「公民的資質の基礎」が、公民としての資質･能力という表現になり、より一層授業とのつながりが明確にされている。この3つの視点は、それぞれ（1）は「知識･技能」に、(2)は「思考力・判断力・表現力等」に、(3）は「学びに向かう力、人間性等」にと、学習指導要領に示された資質・能力の3つの柱に対応している。

これら「公民的資質の基礎」と先に示した「新しい

時代の教養」は、多くの部分で重なっている。大学生に「公民的資質の基礎」を意識した授業を行っていくことが、「新しい時代の教養」につながると考えられるのである。

そこで、教科に関する科目「社会」の中では、この「公民的資質の基礎」を実感としてとらえることができる授業を実践した。

1. 地域の人々の健康な生活や良好な生活環境を守るための諸活動（水道）　2017.5.12

小学校学習指導要領（第３学年及び第４学年）の内容（3）として、次のことが示されている。

地域の人々の生活にとって必要な飲料水、電気、ガスの確保や廃棄物の処理について、次のことを見学、調査したり資料を活用したりして調べ、これらの対策や事業は地域の人々の健康な生活や良好な生活習慣の維持と向上に役立っていることを考えるようにする。

ア　飲料水、電気、ガスの確保や廃棄物の処理と自分たちの生活や産業とのかかわり

イ　これらの対策や事業は計画的、協力的に進められていること。[9)]

この内容を学生にとらえさせるために、大学での水の使い方を調査することにした。

まず、本学の敷地の建物のうち、８棟を選び、そこにどれくらいの蛇口があるのかを予想させた。学生は80～150口という予想を立てた。

その上で、４～５人のグループに分かれて、蛇口の数を調査しにいくようにした。

結果として、８棟で319個の蛇口を数えることができた。学生はこの結果に驚き、多くの蛇口があること、すなわち多くの水を消費していることを感じた。

この活動の後、大学全体では年間24000㎥（2400万ℓ）の水を使っていることを伝えた。これを、年間授業日数で割ると、１日平均16万ℓ使っていることになる。

しかし、これでは実感がわかないので、年間一人あたり11㎥（11000ℓ）を使っていることを伝えた。これを１日あたりにすると、一人約73ℓ使っていることがわかった。[10)]

ここまで示すと、自分たちがいかに大量の水を消費して大学生活を送っているのかを実感できるようになった。

この授業を終えた学生の振り返りは以下の通りである。

- 学校にあるじゃ口の数が想像していたより多くて驚きました。普段１日に自分が使用している水の量を考えたことがなかったので、よい機会となりました。
- 一人一人が１日に使う水の量を知り、衝撃的でした。もっと節約しなければいけないと思いました。
- 普段の生活の中での再発見は、とても重要な役割をはたしているにもかかわらず、気付いていなかったものが多く今後も細かい所を見ていければと思った。
- ただ水のことを勉強するのではなく、自分たちの生活と結びつけると、水を大切にしようと思えるので、よいと思いました。
- 予想を立てることで結果とのギャップにとても驚いたので、子どもたちにも予想を立てさせてから探検などさせたいと思った。
- 使っている水の量をもとに、さらに深くどういった学習問題があるのかを出し合うことで、現代社会の問題を見つけて調べようという意欲がわいてくると思いました。

このように、「水は大切にしなければならない」という概念を身に付けるためには、実感を伴うような調査、自分たちの生活と結び付ける活動が有効だと考える。それが、現代社会の問題を見つけて解決しようとする「公民的資質の基礎」すなわち「新しい時代の教養」につながると考える。

2. 我が国の情報産業などの様子と国民生活との関連（CMのねらい）　2017.6.30

小学校学習指導要領（第５学年）内容（4）として、次のことが示されている。

我が国の情報産業や情報化した社会の様子について、次のことを調査したり資料を活用したりして調べ、情報化の進展は国民の生活に大きな影響を及ぼしていることや情報の有効な活用が大切であることを考えるようにする。

ア　放送、新聞などの産業と国民生活とのかかわり

イ　情報化した社会の様子と国民生活とのかかわり[11)]

この内容を学生にとらえさせるために、CMのねらいを考えさせることにした。

CMは、私たちの生活の中で多くの役割をもっている。CMが社会現象を起こすこともあり、まさに今の社会の様子を表している存在であると言える。

しかし、商品を紹介するCMについては、その商品を知ってもらい、買ってもらうことをねらいとするものが大半で、ねらいがあることを学生が意識することは少ないと考えた。

そこで、ACジャパンの広告を取り上げ、そのねらいを考えることにした。CMにねらいがあることを知り、そこから私たちの生活や考え方を知ろうとしたのである。教材として、ACジャパンのCMを取り上げた。[12] 阪神淡路大震災、東日本大震災など、大災害が発生した時のACジャパンの臨時キャンペーンは、私たちの心に多くのものを残している。

このACジャパンのCMから、以下の7本を取り上げ、それぞれのねらいを考えるようにした。

・「あいさつの魔法」(2010年度)
・「もったいないで明日は変わる」(2015年度)
・「こだまでしょうか」(2010年度)
・「見える気持ちに」(2010年度)
・「やさしさは想像力でひろがる」(2014年度)
・「言葉は、弾丸にもなる」(2016年度)
・「となりの先生」(2013年度)

学生は、CMにねらいがあるということについても最初はほとんど考えておらず戸惑っていたが、1本、2本と考えていく中で、驚きとともに、深くとらえるようになっていった。

その中でも、「もったいないで明日は変わる」は、環境問題としての「もったいない」ではなく、生き方として「あきらめていてはもったいない」「なにもしないままではもったいない」というメッセージが感じられ、自分の生き方とかかわって、深く考えるきっかけとなった。

この授業を終えた学生の振り返りは、以下の通りである。

・普段何気なく見ているCMでしたが、ねらいを考えてもう一度見ると、とても深いと思いました。CMはとても短いので、短い時間でどれほど相手に伝えることができるのかが大切だと思いました。今日見たCMも数秒のCMでしたが、とても心に響くものばかりでした。
・ACジャパンのCMを見て、伝えたいことをくみ取ったように、子どもたちにも自分で情報を理解する力をつけてほしいと思った。
・ほとんどのCMは、私たちに考えるきっかけになってほしいという気持ちがあって、大切なことを伝えてくれているのがわかった。
・CMを分析することで、何を伝えたいのか、どう表現すれば伝わりやすいのかなどを学べると感心した。
・ACジャパンのCMでは、周りの人との関わりを大切にするというようなものが多くて、当たり前と思っている関係を大切にしないといけないと思いました。

このように、CMのねらいを考えるというきっかけを与えると、自分の生活とかかわらせて考えたり、共通する大切なこと（人とのかかわり）などにも気がついたりすることがわかった。

「情報の大切さ」という概念を身に付けるためには、情報の中にある「ねらい」を考えることが有効であった。それが、現代社会の問題を見つけて解決しようとする「公民的資質の基礎」すなわち「新しい時代の教養」につながると考えられる。

V.「社会科観の育成」の視点から『模擬授業』

教員養成の段階において、学生がどのようにして教師として成長していくのかということについては、これまでの教員養成系大学で研究がなされてきている。

大坂は教職課程入門期における社会科教員志望学生の社会科観を「弁別型―教養主義重視」「弁別型－教養主義懐疑」「拡散型」の3つのカテゴリーに分類した。カテゴリー分けに際しては、①自身の中で複数の社会科の目標に対する優劣を明確につけているかどうか（「弁別型」と「拡散型」の分類規準）、②教養主義的な目標に肯定的な態度を示しているかどうか（「弁別型―教養主義重視」と「弁別型―教養主義懐疑」の分類規準）を重視している。[13]

大坂（2016）はこれらのカテゴリーに分けた上で、それぞれに応じた社会科観の育成を目指している。し

たがって、それぞれの優劣をつけるわけではない。人数としては、「弁別型―教養主義重視」と「弁別型」が多く、学生のもつ社会科観の傾向が見られる。

この「弁別型―教養主義重視」の立場をとると、いわゆる知識伝達型の授業を目指す学生が多くなる。これは、「新しい時代の教養」ということと、必ずしも一致しない。「社会科は暗記教科」という思い込みによるものである。

しかし、一方では、その論が「社会科は暗記させる教科ではない」「暗記させる必要はない」という方向に進みすぎ、「基礎的な知識」の習得状況がよくないという状況が生まるという問題も起こっている。そのため、北（2011）は「知識の構造図」を提案し、授業改善に対する提案をしている。

このような「教養」に対する考え方を、どのように整理して、学生に社会科観を形成させるきっかけとするのかは、たいへん重要な課題となっている。そのために、教員による模擬授業と学生自身の振り返りが大切であると考えた。

1. 我が国の国土の様子と国民生活との関連（沖縄）2017.6.9.

小学校学習指導要領（第５学年）内容（1）として、次のことが示されている。

我が国の国土の自然などの様子について、次のことを地図や地球儀、資料などを活用して調べ、国土の環境が人々の生活や産業と密接な関連をもっていることを考えるようにする。

ア　世界の主な大陸と海洋、主な国の名称と位置、我が国の位置と領土

イ　国土の地形や気候の概要、自然条件から見て特色ある地域の人々の生活

ウ　公害から国民の健康や生活環境を守ることの大切さ

エ　国土の保全などのための森林資源の働き及び自然災害の防止 [13)]

この内容を学生に理解させるために、「あたたかい土地のくらし」として沖縄を取り上げ、筆者が模擬授業を行うことで、今後の授業の方法にも興味を持たせようとした。

授業の前提として、学習指導要領にも示されている「47 都道府県」の位置を確認した。これまでの学習経験等で、「47 都道府県」の位置や名称については理解しているはずではあるが、今後教員として指導していく際に、不確かな知識のままであることは、適切ではないと考えているからである。

この後、模擬授業として「あたたかい土地のくらし～沖縄島～」を行った。

まず、沖縄の昔の建物の絵を見て、気づいたことを発表させた。

・家のまわりに木がある。石でかこまれている
・屋根に「しっくい」が塗られている
・窓が大きい

などの気づきが出された。この気づいたことに対して、なぜ、このような家になっているのかを考えさせた。

・台風が来るからではないか
・夏が暑いからではないか

という意見が出された。授業を受ける立場としては、子どもの立場でと指示しているので、そのつもりで答えている。

次に、沖縄の現在の家の写真を見せて、気づいたことを発表させた。

・屋根が平らになっている
・コンクリートで作られている
・白い家が多い
・屋根の上に貯水タンクがある

という気づきがあった。この気づいたことに対して、なぜこのような家になっているのかを考えさせた。

・やはり台風が多いからではないか
・暑さに対して白い家にしている
・沖縄は雨が多いのに、貯水タンクがあるのはなぜか。

という意見が出された。沖縄の古い家から見つけた見方が生かされている。

次に、これらの「見つけたこと」をつなげて「考えたこと」を発表させた。

・沖縄では台風にそなえて、風に強い家を作っている。
・暑さにそなえて昔から風通しのよい家を作っている。
・自然と共存している。
・自然を乗り越えようとしている。

などの考えが出された。

このように、社会科の授業では、「見つけたこと」（事実）をつなげて「考えたこと」（考え）を発表するというのが一般的な進め方となっている。この一般的な進め方を学生に伝えるためには、教員による模擬授業が有効であると考える。

この授業を終えた学生の振り返りは、次のとおりである。

・授業と聞くと、先生が前で1時間話すものというイメージがまだあったけれど、生徒の発言を引き出したりまとめたりする役割をしていて、ずっと話を聞き続けるようなことはなかったから驚いた。板書の工夫一つで、授業のその先をそれとなく示していたのがすごいと思った。
・初めはめあてを出されても、まとめは自分で書けないと思っていたけれど、1時間（45分）の勉強で、自分の中でまとめられて深まったと実感できた。子どもたちも45分間で深められたと思ってもらえるような授業ができれば、すごく良い授業だと思う。
・実際に45分間の授業を教科書なしで受けてみて、受ける前と後で少し成長できたことに驚きました。子どもたちの発言や考え、グループワークで授業することで、子どもたちの考える力とか楽しさも増えるのではないかと思いました。
・初め「めあて」を出されたときに、全然理解できなくて分からなかったのに、授業を進めていく中で、友達とグループになって話し出すと、最後のまとめがスラスラ書けるようになって驚きました。また、事実と考えを分けていることによって混ざらずに、「ここはこうなんだ」と感じることができました。
・社会は勉強すればするほど、自分で考えた時に様々な知識が派生し、広く考えることができる教科です。だから考えることがすごく大切だなと感じました。
・私自身、社会科は苦手だったので、どう教えたらよいかよく分からなかった。しかし、今日学んだ方法ならば、自分にも社会の授業ができそうな気がしてきた。

これらの振り返りの中に、学生の「社会科観」の芽生えが見られる。

一人の学生は、「1時間（45分）の勉強で、自分の中でまとめられて深まったと実感できた」と言い、学習の深まりということを意識している。これを、知識の深まりと考えると、正しい「社会科観」の育成が、自分自身の知識の深まりにつながるということができる。

また、「勉強すればするほど、自分で考えた時に様々な知識が派生し、広く考えることができる」と述べている学生は、広がる「知識」観を感じたと言える。知識は考えることにより「広がる」というのは、重要な気づきである。

このように、45分の授業を通して、学生は「知識の深まり」と「知識の広がり」を感じ取っている。この「深まり」と「広がり」の総体が社会科における「知識」であり、「新しい時代の教養」であると考えられる。

2. 授業を終えた学生のまとめから考える「社会科観」2017.7.21

学生は15回の授業を振り返って、さまざまな感想をもった。その中には、「社会科観」にかかわるものも多い。

・社会というものは覚えるものだと思っていました。しかし、今は社会という教科は覚えるものではなく、考えるものではないかと私は考えています。なぜなら、社会というものは、私たちの身近なものから気づきや疑問を考えたりすることだと思ったからです。そして、今生きている世界は様々な人たちによってつくられていることに気づくことができます。だから、日常生活に感謝する気持ちが芽生えると思います。
・中学生のころ大嫌いだった社会が、大学で授業を受けていくにつれ、こんなにおもしろいんだと関心をもてるようになりました。スーパーでの見学や消防署の見学は、普段体験できないし、話を聞く機会がないため、すごく貴重な体験になりました。また、それと同時に、自分が教職についたときに、子どもたちにも体験させてあげたいと思いました。
・この授業を受けるまでは「社会＝苦手」という考えしかなかったけれど、今はとても楽しいと思え

るようになりました。地域との関わりや日本の暮らしなども、考えれば考えるほど楽しくなるし、なぜそうなるのか疑問まで出てきました。
・15回の「社会」の授業を通して、社会の内容はもちろんですが、授業の展開について多くのことを学べました。私が小学生の頃は机に向かって、先生の言ったことをプリントに埋めていく、それが社会でした。ただ覚えるだけだったのですが、やはり見学して実際に目で見て触れること、体験することは大切だとスーパーマーケットや消防署の見学に行き感じました。
・私は社会がとても苦手で暗記科目と思っていたけど、この授業を通して、暗記科目ではないと思いました。この授業はとても楽しかったし、1・2・3年生のかかわりもできて、本当によかったです。（中略）楽しく社会が勉強できて、苦手意識がなくなりました。
・社会の学習を通して、私は物事を考える力を身に付けました。先生の授業では、自分の意見を発する時間が多く、「考える」ことが大切だと気付かされました。また、自分の意見だけでなく他人の意見を聞くことで視野が広がり、より深い考えを持つことができました。社会の時間は、自分の目で見て、感じる時間が多く、とても興味深かったです。自分の体で体験することによって、ただ座って授業を受けるよりも知識が高まり、積極的に授業に取り組むことができました。これからも、自分の五感を使って学習をしたいです。

このように、もともと社会科が苦手な学生がかなり多く、社会科が得意だという学生の方が少ない傾向があった。その学生が、授業を通して、「社会は考えるもの」という意識をもてるようになり、苦手意識を払拭していくのは嬉しいことである。

同様のことは「教養」についても言える。「教養＝知識」としてしまい、知識は覚えなければならないという考えがちな学生が多い。確かに知識を得ていく喜びは大きいもので、社会を発展させていく力にもなってきた。しかし、まず考える喜びを得た者が新しい知識の吸収を望み、その知識をもとにまた考えるという循環があるということを忘れてはならないのではないだろうか。

Ⅵ. 終わりに

「新しい時代の教養」の視点から、また「公民的資質の基礎」の視点から、学生の「社会科観」の育成を目指す授業の在り方を探ってきた。

「教養」を、覚える必要のある「知識」と考えるのではなく、「考える」ための基盤であり、「考える」目的でもあるというようなとらえ方をしてもらいたいと願っている。「考える」楽しさの先に身に付ける「教養」を、これからも目指していきたい。

注

1）中央教育審議会「新しい時代における教養教育の在り方について（答申）」2002年
2）文部科学省『小学校学習指導要領解説・社会編』2008年
3）戸田靖久「アンケート調査から見た社会科系教職科目受講生の意識と社会科教育法の課題」『大阪産業大学論集、人文・社会科学編23』2015年
4）大坂遊「教職課程後半期における教員志望学生の社会科観・授業校勢力の形成過程　－「洗い流し」はいつどのように起こるのか、あるいは回避されるのか」『学習システム研究5号』2017年
5）中央教育審議会「新しい時代における教養教育の在り方について（答申）」2002年
6）文部科学省『小学校学習指導要領』（現行）2008年
7）前掲書
8）文部科学省『小学校学習指導要領』（新）2017年
9）文部科学省『小学校学習指導要領』（現行）2008年
10）京都市全体では、一人が1日に使う水の量は、約240ℓとなっている。
11）文部科学省『小学校学習指導要領』（現行）2008年
12）「民間の力で、少しでも世の中のお役にたつ活動をしたい」と1971年に産声を上げたのがACジャパンである。設立当初は114の会社でスタートしたものが、現在では1000社を超える規模にまで成長している。2009年には社団法人公共広告機構から社団法人ACジャパンへと名称も変更し、2011年には活動の公益性も認められ、公益社団法人ACジャパンとして、再スタートしている。
13）文部科学省『小学校学習指導要領』（現行）2008年

引用文献

・阿部謹也（1997）「教養」とは何か. 講談社現代新書. 55-56
・大坂遊（2016）教職課程入門期における社会科教育志望学生の社会科観・授業構成力の形成過程とその特質. 社会科教育研究№.85.51
・北俊夫（2011）社会科学力をつける知識の構造図. 明治図書.79－96